

§5-1.

顔の性別認知における肌色の作用

1. 肌色の作用

肌の色は性別の判断を左右する。この可能性は本研究により十分に示されたといえる。その作用の方向性は肌色に対して持たれてきたジェンダーステレオタイプに違うものではなく、色黒肌ならば男性、色白肌ならば女性、といった傾向として取り出されるものであった。だが、当該の作用は無条件に見られるものではなかった。

まず前提条件として捉えるべきは、形態的要素である。男女のパターン合成率が拮抗するような曖昧な形態的である場合、肌色によって判断が大きく左右されるといえる。本実験では、性別の判断を求められた場合において肌色が最終的な手がかりとなり、前述のような肌色の影響が顕著となる傾向が得られた。つまり、判断がつきにくい形態において色黒肌は男性方向に判断を引き寄せ、色白肌は女性判断を促すものと考えられる。また逆に、性別判断に足る十分な情報を形態的に備えている場合には肌の色が当該の判断を覆す要素とはなりにくいということもいえる。つまり、形態的な曖昧性こそ肌色が性別判断を左右するための要件であるといえよう。

しかし、印象評定においては若干異なる傾向が得られた。実験 D（第 4 章）の結果において確認されたように、形態的に特に男性寄り、或いは女性寄りである方がより肌色の影響を受け易かったのである（第 4 章 3-4 項参照）。これについては判断と印象評定という課題の性質の違いを考えてみる必要があると思われる。

実験 D のような印象評定では、性別が曖昧な場合であっても「曖昧である」という印象をそのまま評定値として表現できる。肌色によって微細な変化があったとしてもその違いは微細なまま保たれ、顕著な差としては現れない結果となる。つまり、「曖昧」であるという印象が先行した結果、肌色の変化がどれだけ生じてもそれが性別の印象の変化には結び付きにくかったのではないかと考える。

一方、形態情報のみで明確に性別が判断される場合には、「より男性的」「より女性的」といったように、肌色は性別の印象を加算的に強化する働きを持つものと捉えられる。このような課題の違いによって、判断と評定との間で肌色の作用

条件の差異が生じたことも考えられる。

それでは、このような課題による肌色の作用条件の差をどのように捉えるべきであろうか。後にも述べるように、視覚的に経験される像によって我々の認知傾向は大きく影響されていると考えられる (O'Toole, Peterson, & Deffenbacher, 1996; Campbell *et al.*, 1999; 吉川, 1999a; Valentine, 1991)。ここで考えられることは、肌色に関する視覚経験が男女の各カテゴリにおいて整理されているという可能性である。実際の男女の姿やメディアによって提示される男女の姿が摂取され、男性というカテゴリの中で「色黒—男性的／色白—女性的」という軸が、女性というカテゴリの中でも同様の軸が構築されているのではなかろうか。当該の軸が接触経験に基づいて性別カテゴリ別に存在すると仮定すれば、印象面において肌色の作用が不均等となったことを説明することができるであろう。つまり、性別の判断が難しい「曖昧」な顔においては肌色とその印象に関する接触経験が不十分であるか、ばらつきが大きいために情報体系が構築されず、肌色による印象の変化が生じにくい結果となったのではないかと考える。このような情報体系はジェンダースキーマとして括るべきものであると思われるが、その中に肌色に関する情報も含まれていると捉えることも可能であろう。

2. 肌色の作用における観察条件

しかし、ここで注意しなくてはならないのは、観察条件である。一対比較法を用いた実験 C-2 の結果においては、女性度という印象評定であるにも関わらず、前述の傾向とは逆に性別の判断が安定する形態において肌色の影響が見られなかった。第3章の考察においても述べたように、ここでは「性別の判断が安定する形態」である筈の60%パターンにおいて判断のばらつきが生じていたのである。また、一方では40%パターンや50%パターンにおいて肌色間の差が見られた。このことを考え併せた場合、同じ印象評定課題であっても比較対象がある場合には判断に至るまでの分析方略が異なることも推測される。

比較対象がない観察条件では、内的な基準に則って対象の印象を分析することになる。つまり、印象評定の過程では内的な基準や過去の蓄積情報と対象との間で比較分析が行われることになる。しかし、比較対象が存在する場合には視覚対

象同士の比較分析が行われると同時に、先のような内的な基準との比較が行われていることが推測される。

観察条件による評定傾向の差異については更に探っていく必要があるが、判断基準は非常に変動しやすいものであることを今一度確認すべきであると思われる。特に比較対象の存在によって初めて顕在化する差異はより処理が難しく、個人差も大きいことが予想される。

肌の色については、ステレオタイプ的であるという方向性はほぼ崩れないといえるものの、その影響の強さは顔の形態や観察条件によって異なるといえる。このことを踏まえ、今後は条件毎に追試を重ねて行くことが不可欠であるといえる。

3. 男女の表象

本研究は性別という枠組みに迫ったものでもある。男性とは、また女性とはどのようにイメージされているのであろうか。ここで抽出したイメージとは文学的な意味ではなく、より視覚的なものに限定されるが、本研究にて行なった実験群及びアンケートの結果をもとに、男女の表象に対しても考察を図る。

男女の顔には差異が存在する。この点は部位計測による過去の研究（Burton, Bruce, & Dench, 1993; 山口・加藤・赤松, 1996）や本実験刺激に対する計測結果（巻末資料参照）からも明らかである。本計測結果では、特に顎や眉といった部位においてその差が顕著であることが示された。では、平均程度の男性性、女性性が備わっていない限り性別判断は安定しないのであろうか。答えは否である。本研究から得られた性別の判断特性は次の Figure 5-1-1 のように表現することができる。

男女何れかのパターンが物理的合成成分として 3/4 含まれていれば、優勢となる性別にほぼ確実に分類される。少なくとも本研究における実験結果はこのような傾向を示唆するものであった（第2章参照）。別の言い方をすれば、男性化されればされる程男性として判断されるわけではなく、女性化されればされる程女性として判断されるわけでもないということになる。男女どちらかの顔が 100% となる前に性別判断は一方に著しく傾くといえる。

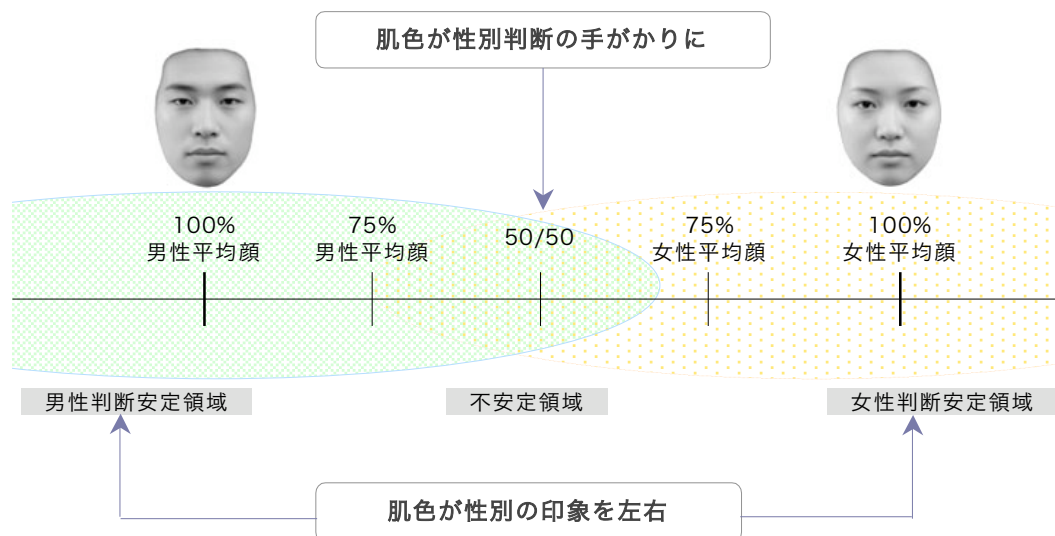


Figure 5-1-1 男女の顔の合成比率と性別判断特性

このような 3/4 (75%) という比率は性別判断を安定させる「飽和点」として捉えることができる。このことより、個人差があったとしても男女の表象は 3/4 という段階までに凡そ包含されていることが推察される。また、女性度という側面においても一方の形態パターンが 3/4 以上含まれている顔同士の間では差が感じられなくなるという傾向を得た (第 3 章 C-1 参照)。男性、女性としての印象が飽和状態になる点がまさに 3/4 であるといえる。つまり、3/4 とは判断が安定するだけでなく、印象の変化が過小視されはじめる重要なポイントであると考えられる。

こうした傾向は同カテゴリに分類された結果として同化が生じたことに起因する可能性もある。同化 (assimilation) は一般に、近接して存在する刺激同士の差異が縮小され、均質化されて知覚される効果を指すが (認知科学辞典, 2002)、同じカテゴリに分類されたものは実際以上に類似して感じられるという指摘もある (Tajtel & Wilks, 1963)。また逆に、印象差が大きく評定された組み合わせについては、異なるカテゴリに分類されていた可能性も考えられる。これはいわば対比現象ということになるが、同化と対比の結果として印象変化の不均等が生じたことも推察される。

また、丸みという観点も非常に重要である (第 2 章 実験 B-1、B-2 参照)。丸みが感じられるか否かによって性別の判断はその方向性を変えるといっても過言

ではない。実験 B-1 及び実験 B-2 の結果は丸みや角張った印象の強さではなく、その方向性こそが重要であることを示唆している。つまり、丸みという要素も男女の表象の中に含まれると捉えることができる。

これらの結果を踏まえた場合、仮に男女それぞれの平均顔がプロトタイプとして性別の判断に利用されていたとしても、平均顔そのものが各判断に必要な特徴量を呈しているのではないことが考えられる。少なくとも単純な平均顔が絶対的な典型として機能しているのではなく、プロトタイプとの類似性を測る場合にも男女のどちらかに近付けた調整が加えられていることが想像される。ここにおける変更調整は性別の判断をより正確かつ効率的に行なうためのものであると考えられる。